
初恋

R a y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋

【ZPDF】

Z1930D

【作者名】

Ray

【あらすじ】

結婚して6年も経つて初めて知った本当の幸せ。それは人を愛するということ…。

その頃、私は大学在学中に知り合った7歳年上の夫と、卒業と同時に結婚して6年が経つていた。

もともと愛だ恋だといったものにあまり関心がなく、流されるままに男を知り、経験を重ねていた私は結婚に対しても全く執着がなかった。

夫のことは愛していないわけではないのだろうが、愛といつよりは情に近い。

一緒にいることを苦痛に思つたことはない。一緒にいれない時を寂しいと思つたこともない。

夫との暮らしは本当に穏やかで、幸せというのはこういつものなのだと思つていた。

私は子供を産まずに、仕事をさせてもらつていた。毎日はそれなりに充実していて、特別不満もない。

そんな生活がこれから先ずっと続くものだと思つていた。

彼と出会つまでは、彼の名は涼。未だに苗字は知らない。

私と涼が初めて出会つたのは、六本木の静かなバーだ。私は東京出身が多く、いつも接待終わりに一人でそのバーで飲んでいた。

その夜も例外ではなく、一日の終わりをその店で過ごそうとしていた。

店へ入つてすぐ、1人の若い男性の姿が目に止まつた。カウンターで1人、ロックグラスを見つめていた。

「いらっしゃい。沙綾さんいつものでいい?」カウンターとテーブルが2つあるだけの小さなお店。私にとつては、第2の家と言つてもいい位落ち着ける場所だ。

常連客が多いこのバーで、初めて見るその男性の姿に、私はいつもグラスを口へ運びながらも、つい目を奪われてしまつていた。

声を掛けて来たのは彼からだつた。

「俺つてやつぱダメつすかねえ。」

「えつ！？」

「もう、わかんないや。」

「どうしたの？愚痴なら聞くよ。」

アル「ホールのせいもあるが、それよりも彼のあまりに弱々しい声に放つておけなくなつた。

「好きになれなくて… いい子だなあとは思つし、この子と一緒にたら楽しいだらうなあとも思つんですけどね… 何ですかね…。」

「彼女は？」

「今別れてきた。」

「なるほどね。」

「じゃあさ、彼女は欲しいの？」

「わかんない。」

「気が乗らないなら、彼女なんていなくたつていいんじゃない？ そのうち、一緒にいたいって心から思える人に必ず出会えるよ。」

「うん… そうだね。」

「俺、涼。お姉さん名前は？」

「沙綾。君…じゃない、涼くんよりずっと年上だと思つたけどね」

涼は8つも年下の21歳。

これまで年上としか付き合つたことがない私は、年下のそれも8つも年下の男の子に興味津々だった。

また涼も同じで、付き合つたことのない8つも年上の女に興味津々だつた。

私たちは1時間ほどをバーで過ごし、共に店を出た。

「沙綾さん、もう少し付き合つてもらえませんか？」

「どこに行きたいの？」

「沙綾さんをもつと知れることな。」

「奇遇ね。私も涼くんの事もつと知りたいな。」

「部屋…来る？」

そのまま、涼と2人私が宿泊するホテルへと向かつた。

ホテルの部屋へ入り、途中コンビニで買つたドリンクを飲みながら
私たちはさつきまでよりもずっと緊張した表情でお互いを見つめて
いた。

「沙綾さん、俺たちまた会える?」私はまだ夫がいる事を伝えてい
なかつた。伝えるべきかどうか悩んでいたのだ。

「私は答えられない」

「なんで?」

「……私、結婚してるの。夫がいる。涼くんにまた会う資格はない
よ。」

涼のあまりにまっすぐな瞳に、正直に話してしまつた。

「でも、指輪外してくれたよね?俺が声掛けた時… 勘違いじゃな
いよね?」

そう、私はバーで涼を初めて見た時から、すでに心を奪われていた。
その涼に声を掛けられ、とつさに左手の薬指から指輪を外していた
のだ。

「そつか、気付いてたんだ。ごめん…。」

「沙綾さんの迷惑にならないなら、沙綾さんのそばにいさせてほし
い。」

「涼くんはまだ若いんだし、私じゃなくとも… もつといい人がす
ぐ見つかるよ。私とはもう会わない方がいい。」

本当は、自分が怖かつただけ。若い涼くんにハマつてしまいそうな
自分が怖かつた。

「沙綾さんが言つたんだよ。一緒にいたいって心から思える人に出
会えるつて。俺は沙綾さんがいいんだ。」

涼にとっては若げの至りで済むかもしれないが、私はそうはいかな
い。

けれど、今まで抱いたことのない感情を涼に抱きつつあることこ
気付いていた私は、この感情の赴くままに身を委ねたいといつ思い
もあつた。

「絶対沙綾さんの家庭を壊したりしないよ。沙綾さんにとっての俺は2番目でも3番目でもいい。だからそばにいさせてほしい。」涼の健気な姿が愛しい。

「涼くん、私はあなたと同じ… 人を本気で好きになつたことがないから、このままあなたといたらきっとあなたを苦しめて、傷付けてしまう。」

それでもいい?そばにいてくれる?」

私たちはそのまま唇を重ねた。

運命なんて信じてはいないが、これが運命なら信じたいと思つた。そして2年が過ぎた今も、涼との関係は続いている。私たちが会えるのは、私が出張で東京へ行く時だけだが、その会えない時間が私たちの遅過ぎる初恋を演出していた。私の中で涼の存在が大きくなればなるほど、私は夫と涼への罪悪感に押し潰されそうになっていた。

私たちは初めて出会つたあのバーを、いつも待ち合わせ場所にしていた。

「ゴメン。だいぶ待たせちゃつたね。」「もつ慣れた。でも俺と会う前に酔っ払いになつてるのはヤダ。」

「ゴメンゴメン。でもまだまだ全然飲めるよ。涼がつぶれるまでくらいは付き合える。」

「俺だつて酔つた沙綾さんの介抱したりとかしたいんだけど。」

「それは残念。涼の介抱なら何度もしてくるんだけどなあ。」

「俺カツコわりい。」

そんなんなんでもないやり取りも、全てが私の宝物だ。

私の前で何度も酔いつぶれた涼の無防備な寝顔を思い出していた。

「涼はそのままでいいんだよ。そのままがいい。」

涼はこの2年でずっと大人になつた。きっともう私がいなくても、素敵な恋愛が出来るだろう。

「俺には沙綾さんだけだよ。ずっと沙綾さんだけのものだよ。」

涼は私の心が読めるくらい、大人になってしまった。

「ゴメン… 私は涼に何もしてあげられない。」

「それはもう言わない約束でしょ？」

私は夫と別れるという選択はない。夫は私を心から愛し、私に穏やかで温かい生活をくれた。そんな夫には何の罪もなく、裏切ることは出来ない。

「沙綾さん、そろそろ出ようか。」

涼は酔うまで飲むこともなく、私の手を引いて店を出た。

涼のマンションへ向かうタクシーの中、私たちはひとつとも言葉を交わせなかつた。

部屋に入ると涼が口を開いた。

「俺が今まで沙綾さんに田那さんと別れてくれつて言つたことある？もつと一緒にいたいとか俺だけのものになつてとか、言つたことある？」

今までに見たことのない涼の表情と強い言葉に、私は何も答えられなかつた。

「俺はただ、沙綾さんが好きなんだ。」

「私も涼が好き。だけど私は涼を幸せにしてあげられない。涼は私にとっても幸せにはなれないの。それならこれ以上一緒にない方がいいよ。今ならまだ間に合うから。」

私は初めから、今日で最後にしようと思つていた。涼と別れるという決断は、今の私にとって一番辛い事だが、それでもこれが涼にしてあげられる唯一のこと。

「沙綾さんは何も分かつてない。俺は何も言われなくとも沙綾さんの考えてることがわかるよ。でも、沙綾さんは俺のこと何も分かつてない。」

いつもの明るくて優しくて笑顔が可愛い涼ではない。

「涼は感情に流されてるだけだよ。必ず後悔する日が来る。私が突き放さなければ、本当に離れられなくなる。」

「俺はこんなに沙綾さんを愛せたことを誇りに思つことはあっても、後悔することはない。」

しばらくの沈黙が続いた。

「涼、終わりにしよう…。」

私のその言葉を聞いて、涼の顔から血の気が引いていくのがわかつた。恨まれても仕方がない。そんなの一瞬で終わる。必ず、別れて良かつたと思う日が来る。

「うん… でも俺、沙綾さんのこと、ずっと好きだから。」

涼が見せてくれる精一杯の笑顔が切ない。

「じゃあね… 私、涼に会えて本当に良かつた。本当に幸せだったよ。」

私は溢れる涙を必死に堪え、笑顔に応えた。

2年ぶりに泊まるこのホテルは、涼と出会い今までいつも利用していたホテルだ。

今夜は眠れそうにないな…

2度と声にすることが出来ない心の叫びと共に涼との2年間を思い返していた。

もう触れることも、名前を呼ぶこともない… 私が愛した男、涼が私の心からいなくなる日は来るのだろうか。

「涼… 涼… 涼… 愛してる…」

夫の元へ戻り、これまでと変わらない生活が始まった。
涼はきっと連絡をくれる… そんな期待をしてしまう私は本当に愚かだ。

2週間が過ぎても1ヶ月が過ぎても涼からの連絡はない。

出張で東京へ行つても、涼の姿を見つけることは出来ない。

もう2度と会えないのかもしれない…

涼に出会うまでは、夫を愛そうと思つていた。涼に出会つてからは、夫の愛に応えたいと思つていた。けれど涼を失つた今、夫の愛を受け入れられずにはいる。

涼は、別れてもなお私の中に存在し続けている。

涼の中に私はもういないだろう。

涼に私が必要だつたのではなく、私に涼が必要だつたのだ。涼と出会つたことや涼に別れを告げたことに後悔しているのも、涼との出会いがなければ、愛するということを知らぬまま、ただ夫に守られ愛され、それが幸せだと思い生きて行けた。涼に出会い、人を愛する喜びと真の幸せを知つてしまつた私は、愛せない夫からの優しさが辛すぎた。

そして愛されないと分かつていながらも私を選び、大切にしてくれている夫の痛みに初めて気付いたのだ。

1年半後：

私に引き抜きの話があつた。業界では有名な東京を拠点としているデザイナーが私をパートナーとして指名してきたのだ。

この1年半、気を紛らわせようと必死に仕事をしていった。元々好きな仕事だつただけに、実力が認められたことが素直に嬉しかつた。そして、東京で暮らしていれば涼に再会出来るかもしれないという思いも少なからずあつた。

しかし、いつ戻るかわからない。戻らないかもしれない。夫は何と言つだらう。

「沙綾の好きなようにするといい。」

夫はそれだけだった。

それから2週間、悩みに悩んで結局東京へ行くことにした。

これから先、夫と一生を共する自信がなくなっていた私には、1人になつてもしつかり歩いて行ける術が必要だった。

「一緒に歩いてあげれなくてごめんね。1人で大変だと思つけど、体に気をつけて頑張つて。」

私は夫から離婚を突き付けられると思っていた。いや、望んでいたのかもしない。

何度も私から切り出そうと思つたが、夫を悲しませたくないという建て前と自分を守りたいという本音から、どうしても言い出せずにいた。

4カ月後、私の東京での暮らしが始まった。仕事はこれまでよりもずっとやり甲斐があり、充実している。24時間のうちのほとんどを仕事に費やしていた。

上京して初めて定時で仕事を終えた日の夜、涼と別れてから初めてあのバーへ行つてみようと思えた。あのバーへ行くことが出来た時は、涼を思い出に出来た時だと思っていた私は、いつもより少しだけ胸を張つて歩けた。

「お疲れ～。」

あの頃と何も変わらない店内の雰囲気にホッとしたながらカウンターに座つた。

「沙綾さん久し振りですね。」

「私、今こっちに住んでるの。やつと仕事も落ち着いてきたから、これからはちよくちよくお邪魔するね！」

この場所は本当に安らげる…… また以前の私に戻れるような気がした。

「そう言えば、涼さんも全然来てないなあ。お元気ですか？」

「あ、私たち別れたの。そつか、涼も来てないんだね。」

涼に会いたい気持ちがないと言つたら嘘になる。けれど、このまま会わなければ忘れられる様な気がした。

バーで2時間ほど過ぐ、「店を出よ」とした時ひみつビデオが開いた。

もう2度と会えない、会わない方がいい、そう思っていた涼が田の前に現れた。

私も涼あまりに突然過ぎる再会に、呼吸も忘れるほどだった。私はそのまま無言で立ち去りとした。田を合わせたのはほんの一瞬、立ち止まっていたのはおそらく2秒ほどだったと思うが、これ以上同じ空間にいることが怖かった。

「元気そうで良かった。」

私の後ろ姿にどんな思いでその言葉を掛けてくれたのだろうと考えると、振り返りてしまいそうになつたが私はそのまま店を出た。

まだ家には帰りたくない。私は何も考えず、ただ夜の街を1人歩いていた。

どのくらい歩いたの？ 気付くとまたバーの前へ戻っていた。すると、涼と思い出がフラッシュバックされ、私はその場へしゃがみ込んでしまった。

涼… 私まだあなたを愛してる…

「お姉さん、そんなとこにしゃがんでちゃダメじゃん。」

顔を上げると涼がいた。

そう、私は涼を求めて歩いていたのだ。涙が込み上げて来た。

「ちょっと歩かない？」

そう言われ、私たちは2年振りに並んで歩いた。

「沙綾さん、今日も出張？」

「私、今こっちに住んでるの。仕事でね。この年で初めての1人暮らし。涼は？」

私の声は少し震えていた。

「俺も頑張ってるよ。沙綾さんにしようもない男と付き合つてたつて言われない様にね。」

涼はまたこの2年で大人になった。

私たちはたまたま通り掛かったカフェに入り、空白の2年を埋めるかの様に夢中で話をした。

「ねえ涼、また会ってくれる？」

「…」

「涼？」

「ゴメン… 沙綾さんとはもう会えない。俺結婚するんだ。」

目の前が真っ暗になった。それでもいい… としがみつきたかったが、前を向く涼の邪魔はしたくなかった。

「愛する人が出来たのね。良かった。幸せになつてね。」

「ありがとう。」

私の初恋は本当に終わつたのだと確信した。私が立ち止まつていた。私が求めていた。私が…

「沙綾さん、そろそろ帰ろうか。」

私たちはカフェを出て、別々の道を歩き出そうとしていた。

「じゃあね。」

「うん。またさつきみたいに偶然会つことがあつたら、シカトしないでよ。」

「そうだね。そうする。」

「じゃ。」

涼は歩き出した。いつの間にか涼の背中はたくましくなつていた。出会いた頃はまだ頼りなくて、甘えん坊で、それが今ではこんなに大きく見える。こんなに遠くに見える。

「涼つつつ…！」

私は走り出していた。

「そばにいさせて。お願い。私、あなたのことを持と見ていたいの。私、あなたのことが、涼のことが…」

「もう遅いよ。」

咳を切つた様に思いをぶつける私を、涼はその一言で遮つた。

「愛してる…」

涼はもう振り返らないと分かつていながら、私は最後の力を振り絞つて、一番伝えたかった言葉を口にした。

その瞬間、何かに包まれるのを感じた。

涼だ。涼が私を抱きしめていた。

「なんで？なんで今さらそんなことを言つんだ。俺はこの2年必死で沙綾さんへの思いを断ち切ろうとしてきたんだ。なのにどうして今さら…」

涼に強く抱きしめられた私は、涙を抑えることが出来なかつた。もう叶わない思いかもしれない。戻ることは出来ないのかもしない。それでも、最後に涼が抱きしめてくれたことが嬉しくて、これから1人で生きて行けると思つた。

「俺も、俺も今でも沙綾さんを愛してる。」

「えつ…」

「沙綾さん、もう一度始めよう。俺、あの頃よりは少しは大人になつたよ。沙綾さんを守れるよ。」

「だつて、結婚するつて…」

「嘘に決まつてるじやん。怖かつたんだ。また、沙綾さんに拒絶されるのが…。」

俺が沙綾さん以外の人を愛せるわけない。」

「涼… 待つて。私、今度はちゃんと向き合いたい。夫と別れる。だから、それまで待つててほしい。」

「沙綾さん…」

「涼がいなくても生きては行ける。だけど、もう涼と離れたくない。」

「沙綾さん、ごめんね。カッコ悪くとも、俺がしがみついでれば、沙綾さんに寂しい思いさせることがなかつたのに。」

私は夫に離婚を申し出た。夫は驚いてはいなかつた。

「沙綾の気持ちは分かつたよ。でも、離婚はしない。」

休みの度に何度も何度も夫のところへ行き、話をしたが夫が頷くことはなかつた。

2カ月後、私は離婚届だけを置き、荷物を全てまとめ家を出た。

「涼、ごめんね。やつぱり離婚はしないって…」

「仕方ないよ。沙綾さんを手放したくない気持ちは、俺が一番分かるから。それに、俺は沙綾さんの気持ちが俺にあるっていう事実だけで十分。」

「涼、これから家に来ない？」

私は再会後初めて涼を部屋へ呼んだ。

「へえ～、さすがプロだね。オシャレな部屋。」

「お茶入れるね。」

「いや～」

「うわっ！沙綾さん猫飼つてたの？」

「涼と別れてからね。守るものが欲しかつたの。」

偉そうな事言つて別れたけど、毎日毎日涼の事ばかり考えて過ぐしてた。涼と別れた事を後悔もしたし、出会つた事も後悔した。」

「俺は沙綾さんを忘れるのに必死だつたよ。結局忘れられなかつたけど。」

「でも大変ね。これからはこの子とあなたを守らなきゃ。」

「沙綾さんは俺が守るつて言つたじやん。」

「頼りないけど…、楽しみにしてる。」

「私たちにはこの子とあなたを守らなきゃ。夫とはまだ離婚出来ていない。」

世間から見れば、不倫の関係。

けれど、私たちにとつてはこれが初恋で最後の恋。
遅すぎる出会いなんてない。出会えた事に感謝して、愛を育めばいい。

涼、私と出会つてくれてありがとう。
私を愛してくれてありがとう。
私が必ずあなたを幸せにするから…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1930d/>

初恋

2011年1月8日15時28分発行